

老人のテレビ視聴行動にみられる性差

香 取 淳 子

(お茶の水女子大学生活文化研究会)

一、はじめに

先進諸国の例にもれず、日本でも六十五歳以上の老年人口は年々増加し、一九八二年には九・六%と、全人口のほぼ一割を占めるに至った。平均寿命も男七四・二二歳、女子七九・六六歳と史上最長記録を更新し、一人でも六五歳以上の老人のいる家庭はほぼ四世帯に一世帯の創合にもなるという。いまや、高齢化への対応があらゆる領域で急務になっているといっても決していいすぎではない。

さて、その高齢者の生活に大きな比重を占めているのがテレビ視聴であることは各種調査から明らかにされている。老人の余暇の過ごし方をみるとテレビ視聴が群を抜いて高く、NHK国民生活時間調査(一九八〇年)をみても、平日の平均テレビ視

聴時間量が四時間を越えるのは、六〇代以上の男子と五〇代以上の女子であった。しかも、「ながら視聴」は高齢層ほど少なく、⁽²⁾「テレビは絶対必要」とするものは高齢層ほど多く七〇代以上では四九%にも及ぶ。³⁾現代日本の老人は質量ともテレビに依存した生活を送っているのである。このように老人にはテレビ依存傾向が強くみられるうえに、その人口が増大しつづけるとなれば、老人のテレビ占拠率はこれから一層高くなるだろう。老人は一体、テレビに何を求め、どのような視聴行動をとるのだろうか。高齢化するテレビ視聴者への対応を考えるにつけても、まず、その実態を把握する必要がある。

そこで、老人の生活行動をふまえたうえで、質的側面、量的側面から詳細に調査を行うことを企画し実施した。本稿ではその調査結果を男女別に集計し、考察を加えてみることにする。

老人のテレビ視聴実態を性差の視点から解明しようとしたのは、つぎのような理由からである。

まず、老年層の人口構成比には他世代に比べあきらかな性差がみられるということを忘れるわけにはいかない。一九八二年の日本の平均寿命をみると男女差はほぼ五歳で、これは、日本ばかりでなく、地域差、文化差を問わず、世界中どの国にも共通してみられる傾向である。¹⁴人口統計からみると、高齢化社会になるにつれ、女子老人の増加することが明白に示されている。また、日本では高齢化の進行ばかりでなく、核家族化も進行しており、その結果、ひとり暮らしの女子老人の増加がきわだっているのが現状である。厚生省調査（一九八三年）によると、ひとり暮らし老人は男子二一六千人に対し、女子八三万人となっており、女子は男子のほぼ四倍にも相当している。

次に、人の役割構造には性差がみられるということを考慮しなければならぬ。老化は心身の老衰プロセスであるばかりでなく、さまざまな役割から解放されていくプロセスでもある。たとえば、老年期の初期に多くの男子老人が定年退職という急激な役割喪失を経験するのに対し、多くの女子老人にとっては社会関係での役割喪失経験による衝撃は緩慢である。むしろ、「empty nest」というような、家族関係での役割喪失に空虚感を覚えることの方が多いといわれている。¹⁵

このような老年期に特有の状況を考えるにつけても、もっとも基本的な属性である性別による視聴パターンを解明する必要

がある。老人の生活に対するテレビの寄与という側面からみても、テレビ視聴行動にみられる性差を看過するわけにいかないのである。

二、調査の概要

老人視聴者についての研究領域は新しく、アメリカでの研究にいくつか散見できる以外は皆無とといっていいほど少ないのが現状である。¹⁶本調査の企図は、老人の生活行動全体の中にテレビ視聴行動を位置づけ、その実態を解明することにある。したがって、単にテレビ視聴行動だけをとりだすのではなく、行動の動機づけとして作用する欲求、その欲求充足の手段としてテレビが選択されることの背景まで視野におさめなくてはならない。そこで、「利用と満足」研究のアプローチを下敷きに調査の目的に沿うよう修正を加え、調査の枠組とした。

調査対象者としては、東京に住む老人の中でも可能なかぎり多様なタイプを選ぶことに主眼をおいた。その際、活動性を基準に老人を把握することを試みている。これは、老人研究を代表する二理論（活動理論、離脱理論）がいずれも活動性を主軸に展開されていることに基づいている。

本研究では、活動性を、自力で外出できる体力、気力のあることを最低条件とし、睡眠、食事、身のまわりの雑事、家事などを除いた自由時間に主に何をしているかという余暇活動の形態の面からとらえていることを断っておかなければならない。

表 1 対象者の基本属性

基本属性		性別		男 163人		女 195人	
				人	%	人	%
年 齢	60 代			55	(33.7)	97	(49.7)
	70 代			88	(54.0)	74	(37.9)
	80 代			20	(12.3)	24	(12.3)
家 族 構 成	ひとり暮らし			13	(8.0)	52	(26.7)
	夫婦			67	(41.1)	36	(18.5)
	子夫婦同居			37	(22.7)	41	(21.0)
	三世帯			43	(26.4)	61	(31.3)
	その他			3	(1.8)	5	(2.6)
学 歴	低(未就学・尋常小)			59	(36.2)	108	(55.4)
	中(旧制中・女学校)			75	(46.0)	79	(40.5)
	高(旧制高・師範・大学)			28	(17.2)	7	(3.6)
	その他の			1	(0.6)	1	(0.5)
余暇活動	学 習 活 動			71	(43.6)	77	(39.5)
	趣 味 活 動			58	(35.0)	56	(28.7)
	無 活 動			35	(21.5)	62	(31.8)

これは、テレビ視聴行動は自由時間の消費という点では余暇活動と競合関係にあること、社会から引退した老人にとっては余暇活動こそが生活行動の中心になっていること、などを考慮したためである。そこで活動形態の明瞭な老人向けの公共施設を単位に対象選択を行うことにし、施設内容、活動内容について十分検討を加えたうえで、世田谷区・老人大学と板橋区・老人大学を調査対象とした。調査時点で板橋区には一三ヶ所

のいこの家があったが、地域特性、集まってくる老人の階層などを考慮し、六ヶ所を選定した。対象者は活動内容の面から次に示す三種に分類される。⁸⁾
 学習活動に何よりも価値をおく「達成動機づけ」の強い世田谷区老人大学学生一四八人(学習活動タイプ)。このタイプは活動形態がもっともバラエティに富んでおり、単に学習活動を行うばかりではなく、趣味、スポーツ、奉仕活動、収入のある

仕事、町内会の活動などを行っているものが他のタイプに比べ、もっとも多い。

次に、板橋区老人いこいの家に集まる老人のうち趣味・スポーツを日常活動の中心にする「遊戯動機づけ」の強いタイプ一三人（趣味活動タイプ）。趣味、スポーツをするばかりでなく、収入のある仕事、町内会の活動などを行っている者もいる。

最後に、板橋区老人いこいの家に集まる老人のうち日常とりたてて何もしないタイプ九七人（無活動タイプ）。以上三五八人が本研究の分析対象者である。対象者の基本属性は表1に示すとおりである。対象者の年齢は六〇歳から八七歳におよび、最頻値は六九歳の二九人、平均は七一・四歳、性別をみると、男子老人一六三人、女子一九五人であった。

調査方法としては、世田谷区老人大学学生には質問紙自記式調査法を（後、一部に対し再調査を実施）、板橋区いこいの家では質問紙による面接法をもちい、調査期間は一九八二年二月二五日から四月一四日に及んだ。

三、老人のテレビ視聴状況

まず、視聴時間からみてみよう（表2）。一日の平均視聴時間が三時間未満のものは男子老人が四一・七%であるのに対し、女子老人は三〇・三%、反対に五時間以上のものは男子老人が二一・五%であるのに対し、女子老人は三六・四%となってお

表 2 男女別テレビ視聴状況

視聴状況		性別	
		男 163人	女 195人
視聴時間	3時間未満	68 (41.7)	59 (30.3)
	3時間以上 5時間未満	60 (36.8)	65 (33.3)
	5時間以上	35 (21.5)	71 (36.4)
視聴態度	選択視聴	127 (77.9)	122 (62.6)
	ダラダラ視聴	7 (4.3)	21 (10.8)
	テレビ漬け	26 (16.0)	51 (26.2)
	チャンネル権なし	3 (1.8)	1 (0.5)

り、女子老人の方が明らかに長時間視聴傾向を示している（P<0.01）。また、視聴態度をみると、「見たい番組だけ見る」というように選択視聴をしているのは男子老人に多く、「ヒマな時はいつでもテレビを見ている」というようにテレビ漬けになっているのは女子老人に多い（P<0.01、表2）。女子老人の方が依存的で、抑制のきかないテレビ接触行動をしていることがわかったのである。何故そうなのだろうか。まず、テ

テレビ視聴行動とかかわりの深い日常の活動形態の側面からみてみよう。

余暇活動をみると、学習活動をしているのは男子老人が四三・六％に対し、女子老人は三九・五％、また、趣味活動をしているのは男子老人が三五・〇％に対し、女子老人は二八・七％といずれも男子老人の方が多い(表1)。日常なんらかの活動をしているのは男子老人に多く、とりたてて何の活動もしていないのは女子老人に多いことがわかった(p<0.01)。このことは女子老人の方がテレビ視聴行動の基盤である自由時間を豊富にもっていることを示すばかりでなく、学習活動あるいは趣味活動というような関心を注ぐ対象をたずずに日々暮らしがちであることを示している。テレビに依存して過ぎざるをえない状況の一つが提示されているのである。

女子老人の方が余暇活動形態が貧弱であることの背景にはさまざまな理由が考えられる。なんらかの活動をするには経済的資源、人的資源、知的資源、健康に支えられたバイタリティ、好奇心、などが必要とされる。そこで、まず、収入源についてみてみると、年金、恩給というような公的扶助を受けていないのは女子老人に多く(男子五・五％、女子一四・九％、p<0.01)、受給している場合でも、職歴をみると、男子老人の六一・三％がホワイトカラー(女子は一・二・八％)であるのに対し、女子老人の大半はこれまでの職歴が無職(五一・三％)であるため年金の受給額にもおおいに差があるのである。学歴

についてみても、低学歴(未就学、尋常小卒)は男子老人三六・二％に対し、女子老人五五・四％、反対に高学歴(旧制高校、師範、大学卒)は男子一七・二％に対し、女子三・六％であった。健康状態についてみると、健康なのは男子六五・〇％に対し、女子五九・〇％であった。いずれについても、女子老人の方が家庭に閉じ籠らざるをえない状況をしめしている。それは翻つていえば、テレビ視聴行動を促進させる要因にもなるものであろう。

日常の活動状況をみても、男子老人の方が意に叶った生活をしている場合が多いからであろうか、現在の生活に満足しているのは男子老人八二・八％に対し、女子老人七七・九％である。しかも、「なんのために生きているのかわからないことがよくある」というように時折り生きる意味を喪失してしまうのは女子老人に多く三〇・八％、対する男子老人は二五・二％であった。このような日常的な心理的欠落感もまた、テレビ視聴行動を促進させるものと思われる。

さて、日常生活から生みだされた心理的欠落感の充足を求めて、人はさまざまな行動をとる。なんらかの活動を行うことで解消する場合もあれば、人との交わりに慰安を見出す場合もある。そこで、対人関係を親戚関係、近隣関係、友人関係、家族関係の四種に分類し、それぞれについて関係の密度を四段階、設定した(表3)。これを見ると、男女差がきわだっているのは、友人関係と家族関係(p<0.01)である。友人関係

表 3 男女別対人関係

		関係の密度		男 163人	女 195人
親戚関係	な 表 部 全	い 面 分 面	的 的 的	人 %	人 %
				15 (9.2)	16 (8.2)
				64 (39.3)	64 (32.8)
				62 (38.0)	82 (42.1)
				22 (13.5)	33 (16.9)
近隣関係	な 表 部 全	い 面 分 面	的 的 的	16 (9.8)	23 (11.8)
				66 (40.5)	63 (32.3)
				65 (39.9)	86 (44.1)
				16 (9.8)	23 (11.8)
友人関係	な 表 部 全	い 面 分 面	的 的 的	5 (3.1)	1 (0.5)
				34 (20.9)	17 (8.7)
				88 (54.0)	106 (54.4)
				36 (22.1)	71 (36.4)
家族関係	な 表 部 全	い 面 分 面	的 的 的	14 (8.6)	46 (23.6)
				5 (3.1)	13 (6.7)
				62 (38.0)	59 (30.3)
				82 (50.3)	77 (39.5)

についてみると、関係をもたないか、表面的なものにとどめて
いるのは、男子二四％に対し、女子九・二％であり、女子の方
が友人関係を大切にしていることが示されている。一方、家族
関係をみると、関係の良好なのは男子八八・三％に対し、女子
六九・八％であった。「心を許し、なんでも話しあい、助けあ
える」というように、家族に全面的な信頼をおいているのは、
男子では五〇・三％と過半数を占める（女子は三九・五％）。こ

れは、配偶者のいるのは男子が八四・〇％にもなるのに対し、
女子はわずか三一・八％であることも関連している。安定し
た人間関係の基盤が「対であること」にあるとすれば、女子老
人は対人関係の面では不安定な状況におかれているといえそう
だ。家族の中では得られない対象欲求を外に向けるためでもあ
ろうか、女子老人では友人関係で良好なものが九〇・八％にも
のぼる。また、日頃の楽しみとして「友人・知人とおしゃべ

り」をあげるものは、女子老人が二一・〇%にもなるのに、男子はわずか六・七%であった。このように、女子老人は家庭内では安定した人間関係を培っているとはいいがたい。このことも、テレビ視聴に耽溺せざるをえない一つの素地を作っていると考えられる。

それでは、マス・メディアとの接触状況はどうだろうか。情報源としてのマス・メディア接触、娯楽源としてのマス・メディア接触を男女別にみたのが表4である。

表四から情報源を見ると、雑誌、本については、性差はそれほどないのに、テレビ（P△〇・〇〇二）、ラジオ（P△〇・〇五）、新聞（P△〇・〇〇二）については性差がきわだっている。女子老人の八五・一%は情報源をもっぱらテレビに頼り、新聞を情報源にすると答えたものは四五・一%であった。一方、男子にとって日常の情報源の第一のものは新聞で七一・八%、テレビはそれよりも下まわり、六九・三%である。また、情報源としてラジオを選択するものは全体にすくないが、女子は一〇・八%で男子（四・三%）の二倍強に相当している。女子老人は活字メディアより電波メディアの方に親しみがちであることがわかった。そもそも、新聞を購入していないものは、男子が六・一%に対し、女子は二九・二%にも及ぶ。メッセージの内容を知るためにまず活字を読み、理解するというプロセスそのものを厭うのでもあろうか、女子老人は情報媒体としては、目で見ることができ、耳で聞くこともできるテレビメディアの方

を好んでいるのである。

次に表4から娯楽源としてのマス・メディアの位置づけをみてみると、娯楽源として第一にテレビをあげるのは女子が四一・五%に対し、男子は三〇・一%で、趣味・スポーツよりも低い。また、男子では、新聞・雑誌・本などの活字メディアを楽しむ層が二六・四%と、テレビに対するのとなんら遜色をみせないのに、女子では一六・四%とはるかに低く、「友人・知人

表4 メディア接触状況

メディア接触		性別	
		男 163人	女 195人
日常の娯楽源	友人・知人との会話	11 (6.7)	41 (21.0)
	テレビ	49 (30.1)	81 (41.5)
	ラジオ	4 (2.5)	8 (4.1)
	新聞・雑誌・本	43 (26.4)	32 (16.4)
	趣味・スポーツその他	89 (54.6)	75 (38.5)
日常の情報源	家族・友人・知人	13 (8.0)	38 (19.5)
	テレビ	113 (69.3)	166 (85.1)
	ラジオ	7 (4.3)	21 (10.8)
	新聞	117 (71.8)	88 (45.1)
	雑誌	5 (3.1)	8 (4.1)
	本	17 (10.4)	18 (9.2)

とのおしゃべり」よりも下まわる。

このように、情報源、娯楽源としてのマス・メディア接触状況をみてみると、女子はいずれにおいてもテレビ依存傾向がきわだっていることがわかった。

ところで、学歴別に情報源をみてみると(表5)、低学歴のものほどテレビに馴じみ、高学歴ほど、活字メディアに親しむことがわかった。低学歴層が五五・四%を占める女子老人(男子は三六・二%)にテレビ志向が強いのも情報処理能力の面からいえば当然なのかもしれない。

余暇活動、対人関係、マス・メディア接触の側面から老人の生活空間を切りとってみると、いずれについても女子老人の方がテレビに依存して暮らさざるをえない状況が明らかに示されているのである。

四、老人にとってのテレビの機能

さて、老人は一体、何を求めてテレビのスイッチを入れるのだろうか。

テレビ視聴を通してどのような満足(充足内容)をどの程度(充足度)受け取っているのかを調べることで、老人にとってのテレビの機能について考えてみたい。本調査では、昼のワイドショー、連続ドラマ、時代劇、サスペンス、現代劇、ニュース、バラエティ、夜のワイドショー、など八種の番組の視聴者反応から抽出したのものにとづき、一二種の充足内容を充足項

表 5 学歴別情報源

情報源	学 歴		低 (未就学・低尋)		中 (旧制中・女学)		高 (旧制高・師範)	
	人	%	人	%	人	%	人	%
家族・友人・知人	21	(12.6)	25	(16.2)	5	(14.3)		
テレビ	143	(85.6)	117	(76.0)	17	(48.6)		
ラジオ	7	(4.2)	20	(13.0)	1	(2.9)		
新聞	64	(38.3)	110	(71.4)	30	(85.7)		
雑誌	3	(1.8)	7	(4.5)	3	(8.6)		
本	5	(3.0)	23	(14.9)	7	(20.0)		

目として設定した。⁹

まず、一二種の充足内容についての回答項目「よくある」ときどきある」「あまりない」「ほとんどない」にそれぞれ、四、三、二、一、と点数を与え、対象者全員について充足内容ごとの平均値を出した。次に、男子老人、女子老人についても同様に集計し、それぞれの平均値が全体の平均値からどの程度乖離しているかを表したのが表6である。

これをみると、女子老人は一二種の充足項目のうち、一〇種について平均以上の充足を得ている。情報メディアとしても、娯楽メディアとしてもテレビに依存しがちであることの反映でもあるだろうか、実に多様な充足な引き出している。このうち、男女間で有意差のみられたのは充足項目(7) (p<0.01)、(8) (p<0.05)、⑩ (p<0.01)であった。女子老人は「身のまわりの人間関係に役立つ知識が得られる」、「生活に役立つ実用的な知識が得られる」、「番組の中に人物にくらべ、自分の方が恵まれていると感じる」、などの充足をテレビから引き出すことが男子老人に比べはるかに多いのである。

一方、男子老人はテレビからはそれほど多くの充足を引き出していない、一社会のために役立ちたいという気持の手がかりが得られる」と「世間の動きに遅れないですむ」で、充足が高かったのが特徴である。女子老人がテレビ視聴を通し、生活情報を得たり、他人との比較を通しての自己確認に充足を見い出しがちなのに対し、男子老人は社会情報を得たり、社会とかかわ

表6 男女別充足度

No.	充 足 内 容	全体の平均値	男	女
1	生活のわずらわしさや悩みを忘れてくつろげる。	2.59	-0.04	+0.09
2	風景や舞台装置をみて、楽しい気分になる。	3.27	-0.1	+0.09
3	知らなかったことを知り、世界が広がったように思う。	3.46	-0.04	+0.04
4	番組に夢中になって、我を忘れてしまう。	1.67	-0.58	+0.02
5	番組の中に尊敬し、見なりたいと思える人がいる。	1.79	-0.27	+0.08
6	番組の中に好きでたまらないと思える人がいる。	1.44	-0.03	+0.02
7	身のまわりの人間関係に役立つ知識がえられる。	3.01	-0.2	+0.17
8	生活に役立つ実用的な知識がえられる。	2.96	-0.17	+0.14
9	社会のために役立ちたいという気持の手がかりがえられる。	1.61	+0.06	-0.06
10	番組の中の人物にくらべ、自分の方が恵まれていると感じる。	1.93	-0.24	+0.2
11	世間の動きに遅れないですむ。	3.0	+0.14	-0.12
12	自分とその場にあわせているような気分になる。	1.49	-0.02	+0.01

りを持つことに充足を見出しがちなのである。たしかに、男女別に好む番組を上位から五位までをとってみると、ニュース、時代劇、教養、クイズ、というような男女を問わず老人に好まれる番組ジャンルがある一方で、男子はスポーツ、女子はワイドショーというように、性差のきわだつ番組ジャンルもある。

このようなテレビから引き出す充足内容の性差は、新聞紙面の関心領域にみられる性差とも呼応している。

女子老人が、テレビ・ラジオ欄 (PΛ〇・〇一)、家庭欄 (PΛ〇・〇〇一)、などに関心を寄せがちであるのに対し、男子老人の関心はスポーツ欄 (PΛ〇・〇〇一)、政治欄 (PΛ〇・〇〇一)、経済欄 (PΛ〇・〇一) などに集中している。

子どもを産み育て、家庭を維持しつづけてきた多くの女子老人の関心が家庭生活の域を出ないのに対し、社会とのかかわりの中で生計の資を得る手段を画策してきた多くの男子老人の関心は老いてなお、社会情勢、社会参加に向けられている。往年の役割構造にみられる性差が、種々の役割を喪失した老後のマス・メディア接触行動にまで如実に反映しているといえそうである。ところで、女子老人は一〇種の充足内容において男子老人よりも高い充足を得ていることがわかったが、その中でも充足度の平均値が高なのは充足内容(1)、(2)、(3)、(7)、(8)、であった。女子老人はテレビには主として、精神的、情緒的不安、あるいはストレスを解消するための媒体、ストーリーや背景としての情景や風景に過去の追憶を重ねあわせることにより社会からの

離脱による衝撃をやわらげるための媒体、めまぐるしく変化する現代社会を監視するための媒体、身近な人間関係を円滑にむすんでいくための教材、あるいは、現代社会に適応するためのいわば再社会化のための媒体、等々の機能をもたせているようである。一方、男子老人にとって、充足度の平均値の高いのは充足内容(1)であった。テレビに対してはもっぱら、社会環境を監視するための機能をもたせることに終始しているのである。

五、おわりに

さて、自力で外出し、他人とコミュニケーションをもつだけの気力、体力のある老人のテレビ視聴行動をみると、性差のきわだつことがわかった。一口に老人といっても、その実、千差万別、もっとも基本的な属性である性別によってもテレビ視聴行動はおおいに異なることがわかったのである。この結果をみても、暦年齢は個人々人を機械的に処理するには役立つが、行動の正確な指標にはなりにくいとする G. Maddox の指摘¹⁰を思い出さないうけにはいかなない。老人は決して、年齢によって分けられた一つの階層集団ではなく、種々の属性によってさらにセグメント化されるものだとすることを、まず、視角に入れておく必要があるようである。

A. M. Rubin (一九八一)等は、若年グループと老年グループとにわけ、視聴行動を調査した結果、視聴行動を規定する最たるものは、暦年齢ではなく、個人々人のおかれたコミュニケーション

ション、社会的、心理学的状況である、としている。¹¹まさに、「先有傾向」¹²こそが視聴行動を規定するというのである。

たしかに、本調査でも視聴時間、テレビから得る充足の内容とも、性差が明らかになった。生物学的性差が役割上の性差をうみ、それが日常の活動内容の差異を導き、関心領域の差異を呼ぶ、というような連鎖が「先有傾向」としての性差をますます強固なものにしている。長年にわたって蓄積されてきた、行動規範としての性差は、役割上の性差が解消した老年期にあっても安定し、堅固なまま、テレビ視聴行動を規定しているのである。

子を生み育て、家庭を維持するという責務を負って生きてきた女子老人は、子が巣立ち、家庭維持をそれほど念頭におかなくてもいい状況になってもなお、関心は、家庭の域あるいは日常生活の域を出ないことが多く、テレビ視聴からも即時的、実用的な効用を求めがちである。しかも、余暇活動が貧困で家庭内での対人関係が希薄、教育レベルが低く、情報源、娯楽源の選択肢が貧弱、というような状況におかれていることの多い女子老人は、手軽に利用でき、わかりやすく、臨場感のもてるテレビに依存しがちでもある。W. Schramm (一九六九)のいうように、諸活動、諸関係が減少し、心理的にも孤独感、疎外感を抱きやすい老人にとって、マス・メディア、とくに、テレビは測りしれないほど重要な役割を果たしているのである。¹³

先述したように、日本社会が高齢化するにつれ、テレビに依

存しがちで、テレビから多様な充足を得ている女子老人が増加していくことは必定なのである。これから二一世紀に向けて、老人の人口構成比が増すにつれ、どのような時間帯にどのような番組を提供していくか、老人視聴者の実態に即した対応が迫られるようになるであろう。

さて、性別は人口動態から社会動向を予想することもふくめ、きわめて把握しやすい指標である。とはいえ、現在の老人にみられた行動指標としての性差が将来の老人にもあてはまるとはいえない。生物学的性差はかわらないにしても、役割上の性差は学習されるものであり、どのような社会、どのような時代背景のもとで社会化されたかということに大きく影響される。特に技術革新の結果、社会構造にも変化が生まれ、役割のうえで従来のように性差が顕著ではなくなった現在の若年層が老人になるときにはテレビ視聴行動にもこのような差異はみられなくなるかもしれない。

今後は、何が普遍的老化で何がその世代の持つ特徴なのか、その時代の社会情勢に特有のものかを明らかにしながら、老人にとってのテレビの機能を把握、解明することが肝要であろう。〔付記〕本調査ではカイ二乗検定で集計結果の有意差の判定をおこなった。有意水準については文中の必要な個所に示している。

〈注〉

(1) 『老人生活実態調査報告書』東京都福祉局総務部調査課、一九八〇年、九二ページ。
 (2) 小川文弥・上村修一・日本人とテレビ(1)、「文研月報」五月号、一九八〇年、一二ページ。
 (3) 同、一四ページ。
 (4) L.M. Verbrugge, Women and Men: Mortality and Health of Older People, "AGING IN SOCIETY", M.W. Riley, B.B. Hess, K. Bond, London, LAWRENCE. ERLBAUM ASSOCIATES, Inc, 1983, pp.162-163, 朝日新聞、一九八三年、七月三日。
 (5) Simone de Beauvoir, La Vieillesse, Gallimard, 1970, 朝吹三古訳『老い』(上) d.四三、一九七二。
 V.L. Bengtson, P.L. Kasschau, the Impact of Social Structure on Aging Individuals, "Handbook of THE PSYCHOLOGY OF AGING", J.E. Birren, K.W. Schaie, New York, Van Nostrand Reinhold, Inc, 1977, pp. 333-334.
 (6) R.W. Kubey, Television and Aging: Past, Present, and Future, The Gerontologist, Vol. 20, No.1, 1980, にアメリカでの老人視聴者研究の紹介がある。
 (7) 野島正也、老人の余暇活動、『老年社会学』副田義也編、垣内出版、一九八一年、一八八ページ。
 (8) 余暇活動形態別にみた老人の視聴行動については「放送レポート」No.63、64、「社会老年学」No.19に既報。
 (9) 『番組特性(充足タイプ)調査実用化研究』日本民間放送連盟放送研究所、一九七七年、二七一五七ページを参照して作製。
 (10) G.I. Maddox, J. Wiley, Scope, Concepts and Methods in the Study of Aging, "Hand book of AGI-

NG AND THE SOCIAL SCIENCES", R.H. Binstock, E. Shanas, New York, Van Nostrand Reinhold, Inc, 1976, p. 16.
 (11) A.M. Rubin and R.B. Rubin, Age, Context and Television Use, Journal of Broadcasting, Vol, 25, No.1, 1981, p. 3.
 (12) 先有傾向といふのは、人びとが過去の経験の蓄積にともなうつくりあげてきた、知識関心、意見、態度などの総称。(竹内郁郎、マスコミュニケーションの受容過程、東京大学新聞研究所紀要、第十二号)
 (13) W. Schramm, Aging and Mass Communication, "AGING AND SOCIETY", M.W. Riley, J.W. Riley, M. Johnson New York, RUSSELL SAGE. FOUNDATION, 1969, pp. 372-373.